

看護学生を対象とした防災教育方法に関する文献レビュー

永 易 裕 子

要旨

看護学生への防災教育の実態を明らかにすることを目的に文献レビューを行った。2011年以降に実施された研究について、電子データベースおよびハンドサーチによる和文・英文論文の検索、文献選択基準・除外基準に基づいた検討を行い、19論文を選定した。看護学生を対象として実施されている防災教育方法は、防災訓練、講義・演習、被災地訪問、学生による防災に関する資料作成の4種類であった。看護基礎教育において、学生の防災意識を高めて防災行動へと繋げるには、居住地域を視野に入れた防災を学生自らが考えられるような災害看護教育が必要であり、その重要な鍵は「学生の主体性」で、学生の感情を動かす疑似体験やリフレクションを活用した取り組みが効果的であると示唆された。

キーワード：看護学生、防災教育

はじめに

日本は、地形、地質、気象などの自然的条件から、台風、豪雪、土砂災害、地震、津波、火山噴火などによる災害が発生しやすい¹⁾ため、誰もが被災者になる可能性がある。諸外国と比較して、日本は予測不可能な地震災害が多く²⁾、その災害の特殊性から、日頃から防災対策を行うことが求められている。そして医療職者は、災害時に果たす役割の重要性から、自身の防災対策を十分に行う必要があると言われている³⁾。したがって、将来災害時の医療に関わる立場となる看護学生は、まず災害時に自分を守ることができるよう防災意識を高め、防災対策を講じていくことが求められる。しかし、看護学生の災害看護への興味関心は災害直後の急性期の看護実践に置かれており、看護学生の防災意識は低く防災行動に繋がらない。学生は対策を講じれば被害を軽減できると認識しているにも関わらず、防災対策を十分に行っていない⁴⁾。また、看護学生と他学部の学生を比較した結果、看護学生は、災害や防災に対する興味、災害時の役割意識などは高いが、避難行動や対策などの防災行動は他学部の学生と同様、あまり備えがなく、行動が伴っていない⁵⁾と報告されている。濱本ら⁶⁾が行った最新の調

査では、看護学生の防災意識や防災対策を講じている割合は、一般成人を調査した結果と比較して低いことが確認された。

日本における災害看護は、1995（平成7）年に発生した阪神淡路大震災を契機にその必要性が強く求められるようになった。その後、2011（平成23）年に東日本大震災を経験し、災害看護に関する教育や研究への関心は一層高まっている。看護基礎教育においては、2009（平成21）年度の第4次改正カリキュラムで統合分野が新設され、災害看護に関する教育が追加された。「災害直後から支援できる看護の基礎的知識について理解する内容とする」ことが留意点として示され、看護基礎教育における災害看護の教育内容の充実が求められている。2014年12月～2015年3月時点で、災害看護関連科目の開講の有無について、大学の開講率は87.3%、大学以外の開講率は99.1%であることから、災害看護関連科目は専門科目として定着している状況にあるといえる⁷⁾。しかし、災害看護学の未履修者と既履修者では、防災に対する関心や災害に対するリスク認識に有意差は認められていない⁶⁾。

そこで今回、看護学生が防災意識を高め、防災対策を講じるための効果的な介入への示唆を得るため、現在実施されている看護学生への災害看護教育、なかでも防災教育に焦点を当て、その実態を把握することを目的に文献レビューを行った。災害看護教育の実施状況や教育内容は国によって異なっており⁸⁾、必ずしも日本と諸外国の研究結果を統合できないことから、本レビューでは日本の看護学生のみを対象とした防災教育の実態と課題を探索することとした。

研究方法

1. 論文検索方法

医中誌とCiNiiの電子データベースおよびハンドサーチによる文献検索を行い、和文・英文文献を検索対象とした。検索対象期間は、東日本大震災以降の2011年から2021年9月とした。検索語および検索式は表1に示した。

表1. データベースの検索語および検索式

データベース	検索語および検索式
医中誌	#1 看護学生[シソーラス用語]
	#2 災害[シソーラス用語]
	#3 (#1 and #2) and (DT=2011:2021 PT=会議録除く CK=青年期(13~18),成人(19~44))
CiNii	#1 看護学生 AND 災害 AND 2011:2021

2. 文献選択基準および除外基準

文献選択基準は、「日本の看護学生に対する防災教育とその効果を調査した論文」とした。除外基準は、会議録、系統的レビューや総説などの2次データの解析とした。

3. 用語の操作的定義

本研究において「防災教育」とは、平常時における事前準備、災害発生時、復旧・復興期、復興後の4つの段階において、人々が自ら災害に適切に対応し、被害を軽減することができるようになるための知識を備え、判断し、行動する能力を育む教育とした。

結果

1. 論文の選考過程および選考結果

論文の選考過程および選考結果を図1に示した。電子データベースの検索の結果178件の論文が抽出され、49件の重複論文が除外された。ハンドサーチによる追加はなかった。129件の論文に対して文献選択基準・除外基準に基づいて検討した結果、対象者に日本の看護学生が含まれていない論文86件、防災教育方法とその効果についての記載が含まれていない論文14件、自然災害を対象としていない論文1件を除外し、最終的に19論文^{9)・27)}をレビューの対象とした(表2)。

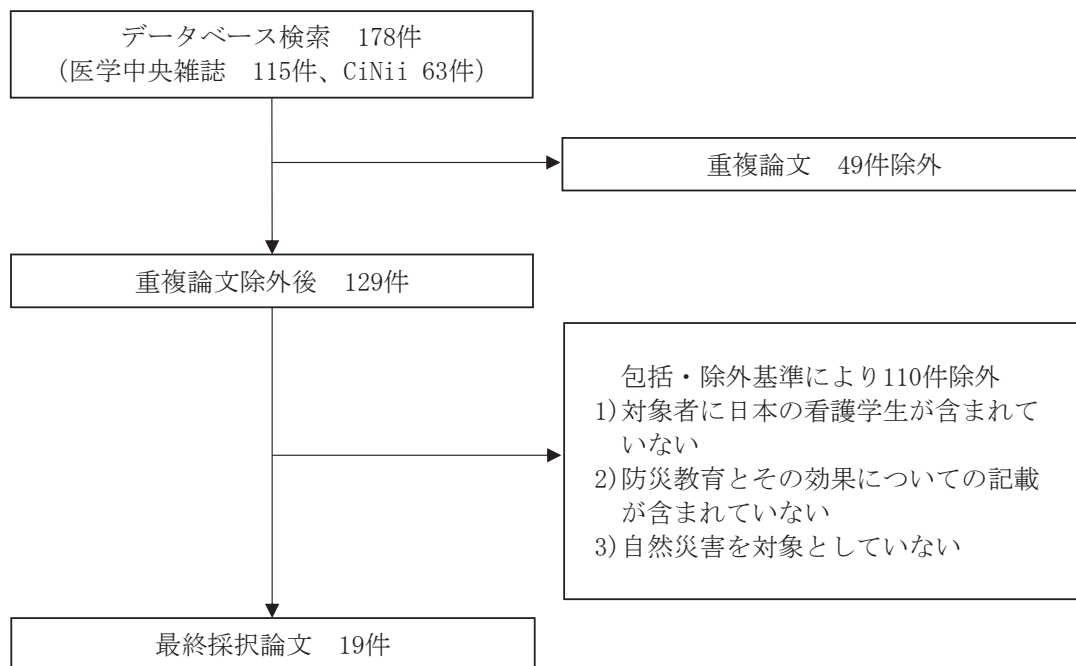


図1. 論文の選考過程

表2. 包括論文の概要

タイトル	目的	教育方法	対象者	教育効果の評価方法	教育効果
北村ら,2011 ⁹⁾	医療救護訓練を取り入れた災害看護の教育効果を明らかにする	医療救護防災訓練への参加	看護専門学校2年生39名	訓練参加後の感想(自由記載)を質的に分析	傷病者の心理面や救助者の態度など夜を演じるなかで、不安感、孤独感を感じ適切に声掛けで安心感が得られた。見学者は、机上での知識と照らし合わせ客観的に救助活動を見学することで、組織的な救助活動や医療活動、トリアージの不十分さを学んだ
前田ら,2011 ¹⁰⁾	防災訓練にトリアージを取り入れた学習の実践報告	トリアージを取り入れた防災訓練実施	135名(1年生50名,2年生40名,3年生45名)	訓練前のトリアージの役割の認知の有無など、訓練に対する意見を自由記載で求めた	トリアージを1年生が70.0%,2年生が92.5%,3年生が100%認知していた。「実施者の共有」「自傷者の共有」「全法を通しての学生の認識」の3つのカテゴリが抽出された。学生の意見の総数は49件で、「実施方法への要望」「VTRへの要望」「メモリの感想」等があった。学生は、全校での学びの共有からトリアージの実施者・自傷者の心理面に関して学び、トリアージと並ぶ処置を組み合わせた訓練実施は学習の動機づけとなり、トリアージが示唆された
増田ら,2017 ¹¹⁾	アクションカードを用いた防災訓練の教育効果を明らかにする	A看護専門学校で実施されたアクションカードを用いた防災訓練	学生12名,教職員27名	学生(シラサ委員,疾病役の12名)と教職員(計31名)を対象とした質問紙調査	学生は「臨場感のある訓練であった」「教員やクラスメイトから援助があった」等と回答し、教職員は学生の良かつた点として、「安全の確保の行動ができた」「主体的な行動ができた」等と評価していた。訓練を通して、教職員は「学生の訓練に対する希薄な意識」「教職員の情報伝達改善」等が挙げられた。学生は「指示や救護などに関する迅速な対応」を挙げている
河村ら,2019 ¹²⁾	長久手市内一斉防災訓練に参加した学習効果(血圧測定等)を実施	市内レベガルの防災訓練へ参加し、訓練者の健康相談(血圧測定等)を実施	2年生42名,災害看護学(1単位,58コマ,選択科目)を履修済み、	防災訓練参加後のリアクションシートから学習成果を抽出し、質的に分析	「看護職が変容する機会になった」「臨床実習と防災訓練での環境の違い」「地域で生活している住民を知ることができた」「防災訓練の意義」「災害発生時の避難所看護の在り方」「内服薬やお薬手帳の携帯の必要性」「外国人被災者への支援策」等の意見が挙げられた
原田ら,2012 ¹³⁾	看護学生の災害看護キャッチアップに関する学習内容を見学	①A市主催の災害訓練への参加、②研修会への参加、③メダカイカラルラー(医療チーム)が特殊なキャッチアップを実施した模擬患者を診察し限られた時間内に的確に治療ができるかを競う技能コンテスト	3・4年生(5名)	訓練参加から1週間以内、30分程度の半構成的面接を実施した。遠隔度の半構成的面接を活用し、遠隔録は、災害看護の活動経験、訓練および研修参加を通しての学び、今後の学習への関心の3つの内容別に、カテゴリー化した	「大学での学習機会に限られている」「災害に関わる訓練やボランティア活動への参加の経験がない」「身近で災害が起こっても自分の生活に影響がない」「ボランティア活動への関心が薄い」「東日本震災での被災状況のリアルさを実感したものの、自分の住んでいる地域への被災は想定できない」「看護師や保健師の活動の実践を写真で見たり、身近に被災された方の体験を聞いたりすることで災害看護への理解が深まった」「災害看護の実践を見聞きすることで、被災地の状況についての学習ができた」「ボランティアに参加することで、ボランティアがスムーズに動けるための拠点づくりや運営の実践を知った」「災害看護への関心が学習経験を広げたいという気持ちに広がった」「日頃からの地域住民とのかかわりが希薄なこと、災害時に助け合える関係ができていないこと」が挙げられた
横田ら,2011 ¹⁴⁾	避難所宿泊体験による意識の変化を明らかにする	平成21年度地域防災訓練として避難所の宿泊体験に参加した	平成21年度地域防災訓練として避難所の宿泊体験に参加した地域住民及び看護学生(人数・学年記載なし)	地域住民及び看護学生の防災対策に関する意識と変化に関する質問紙調査	日頃の防災対策では5項目が5割該当したが、他は4割以下であった。地域住民は「地域の防災放送を聞く」「非常持ち出し物品を用意する」が高く、学生は「防災センターでの防災体験が高かった。訓練実施後の意識は、全体では「非常食や飲料水の用意」「家族と集合場所の決定」等10項目が高かった。住民は「消化器の準備」等の5項目が有意に変化し、家庭、家族の安全、行政や業者が提供する情報の活用など対策の選抜が拡大していた。学生は「非常食や飲料水の用意」等4項目が変化し、手帳に準備できることから変化していた
丹下ら,2013 ¹⁵⁾	学区防災訓練に参加するための準備活動と訓練の学びを明らかにする	岡山市平井学区防災訓練に参加するための準備活動と実施訓練を、看護学生を中心とし、他学区の学生と協力しながら実施した	学生19名(女性18名,男性1名,看護学科17名,食物栄養科学科2名,2年生15名,1年生4名)	体験レポート(自由記述)の内容を質的に分析した。	「準備期間における良好なチームワークの構築」「訓練実施時、平常心でない精神状態」「知識・技術習得の重要性」「正確な情報の大切さ」「1年生の自律に向けた看護師像」「12年生のリーディングがとれた看護師(救助者)像」と、日頃からの地域住民との触れ合いの大切さ「警察署、消防署、学区の地域住民、市役所などの公・民・官」と、日頃からの見える連携の重要性「地域の特徴(地盤が低い)ことから、地域住民の防災意識が高まる、大学としての防災に関連した役割、機能が重要」
政時ら,2017 ¹⁶⁾	災害の専門家の訓練に参加した看護学生の学習・救急に関する学習意欲や学びを明らかにする	地区の総合防災訓練で、初動対応訓練、風水害対応訓練、地震災害対応訓練、誘導・搬送訓練、ライフライン応急復旧を見学、学生は主に模擬負傷者、一部負傷者の避難誘導、模擬負傷者は受傷箇所に応じた傷シールを使用、アイマスクを装着	12名(4年生8名,3年生4名,男性2名,女性12名)〔災害看護の講義や演習は未履修〕	①対象者の属性と総合防災訓練への気づきや学びについて、自由回答②訓練後実施したアンケートの自由記載を質的分析、自由記載はクオリティを分析	9名が想像していた訓練と実際の違いを感じていた。災害看護の学びでは「被災者の心理」「多職種連携」「適切なトリアージ能力」「看護師のコミュニケーション能力」「災害看護の学習の必要性の認識」について学習意欲や学びが向上した。災害看護では「災害看護を学びたい」「DMATについて学びたい」などの意見があり、学習意欲の向上が伺えた。災害看護に必要な倫理問題や初期対応以外の看護の学びは得られていないことが分かった
丹下ら,2015 ¹⁷⁾	大規模地震を想定した防災訓練に参加した学習意欲や学びを明らかにする	学生が、町内会防災訓練に救護者役として参加、地震発生時の発災サイクル、急性期を想定した大規模災害・中国・四国ブロック緊急消防援助隊合同訓練・要救助役として参加した	[実践 A]9名(4年生,女性8名,男性1名),[実践 B]28名(4年生9名,3年生11名,1年生8名,女性26名,男性2名)	提出された全参加者の記録から、重要な学びや救護者役、要救助者役としての感じの思いを質的に分析	救護者役の学びは、「自分の安全の確保」「隣住民と協力し、助け合いながら周りの安全の確保」「訓練は地域住民が避難路を確認する機会」「救出出しの必要性」要救助者役の学びは、救助時の「不安と孤独への怖さ」「先が見えないこと」「人に身を委ねる事の怖さ」「迅速な判断からくる安心」「快活な動きの活躍からくる安心」「被災による不安や心配などの軽減」また、日頃から訓練をし、備えることが被災に繋がると学び、事前学習(医学・テキストなど)を通して実際に訓練をすることで、テキスト内容を理解・習得できていた
柏木ら,2016 ¹⁸⁾	日本赤十字社第一ロケット(北海道・東北)合同災害看護訓練の活動報告	平成26年度の日本赤十字社第一ブロック支援合同災害看護訓練に、A大学・短期大学の学生が被災者役とボランティア役として参加し、その他の学生は医療救護訓練を中心に見学した	被災者役とボランティア役は看護学科と介護福祉学科の2年生、傷病者役196名、避難者役31名、防災ボランティア役20名、救護ボランティア役20名、見学者は看護学科1・3・4年生と介護福祉学科1年生,364名	訓練後のアンケート調査を質的に分析	被災者役体験では「被災者の心理的状況の理解」「被災者側の立場になった援助の必要性」を学ぶことができていた。ボランティア役の体験では、「状況判断能力が必要である」「避難者のニーズに沿った援助をする」ということが大切であることなど、援助者に求められる態度を学ぶことができていた。また、訓練を通して救護員としての活動を行う自己の姿がイメージ化され、学習の動機づけになっていた

河村ら,2020 ¹⁹⁾	防災訓練活動を立案・実施する共同プログラムの全プロセスにおける学習内容を明らかにする	2018年度看護学部とB大学日本語教員課程の担当教員と学生20名、看護学科1年生20名、看護学科2年生20名、3年生20名、4年生20名、日本語教員課程1年生20名、2年生20名、3年生20名、4年生20名	事前アンケートと各合同ワークショップ①②の満足度は単純集計、自由記述および全プログラム終了後の課題レポートは質的に分析	「自分たちで調べて情報を集めていくというよりも、災害時に使えるんだと身近な生活用品の見方が変わった」「災害の時のように行動すればいいのかなど専門家の情報も大切だが、それよりも、災害が起きた際に自分からどうするかを考えられるのが重要だ」という、自分たちで考えて作り上げたからその学びがあった。異なる専門性を有する学生が協働していく過程で、専門的な知識を対象者に合わせて分けてやりやすく表現することの重要性を再認識し、専門職としての視野を深めていた。互いの専門性を学び合い、共に取り組む体験学習は不可欠であり、平時から協働教育を推進していく重要性が示唆された
中村ら,2013 ²⁰⁾	災害看護学の履修者と看護学生の防災意識と防災行動との関連を明らかにする	平成23年度A大学看護学部在学中の1年生90名、2年生91名、3年生98名、4年生100名、合計379名	防災意識、防災行動に関する自己記入式質問紙調査、1年生・2年生を災害看護学履修群、3年生・4年生を既履修群として分析、防災意識については関係府による「防災に関する世論調査」を参考に必要項目の抽出を行った	履修の有無において関連が認められた項目は、住まわが家族と同居及び実家において、「家具や冷蔵庫などを固定し転倒を防止している」と防災マップの「認知あり」であった。看護学生は、災害看護学で「災害時の備え」等の知識はあるが、実際の行動に移すことは困難な現状が明らかとなった
林ら,2016 ²¹⁾	防災セミナーの教育効果を示す	災害・防災に関連した項目を質問紙調査した。防災セミナーを受講した学生と防災セミナーを受講していない学生との比較。アンケートの結果を分析し、意見など自由記述する欄を設けた(無記名式質問紙調査)	災害・防災に関連した項目を質問紙調査した。防災セミナーを受講した学生と防災セミナーを受講していない学生との比較。アンケートの結果を分析し、意見など自由記述する欄を設けた(無記名式質問紙調査)	家族と同居しているものが学生51名、教員10名、1人暮らしが学生10名、教員0名であった。防災セミナーには学生61名(男性3名、女性14名)、女性14名が参加した。参加率は学生98.0%、教員68.0%。在学時の避難経路・避難場所、学内の防災施設・設備の位置を確認することができたことが確認された。防災セミナーに参加することで、災害時の具体的な行動のとり方や、防災設備の具体的な使用方法や防災設備の状況を知りたいと関心が高まっている。反面、将来起こりうる災害に対する不安も感じていることが明らかになった
井上ら,2019 ²²⁾	シミュレーション教育による「災害看護」の教育効果と課題について明らかにする	「救命救急医療論」の授業を、基礎・成人・精神・母性・小児・老年・在宅・公衆衛生からなる各看護領域の統合授業とし、発達段階、生活状況、災害井戸、活動場所を考慮した領域別の災害事例を用いたシミュレーション教育を実施した	授業終了後の質問紙調査、災害看護に関する関心度は0～100の1段階階級授業前後で単純比較した。自由記載は、「知識、技術、態度、行動、感情、総合」の6のカテゴリーに分類	「情意領域に留まらず認知領域、精神運動領域の調和が取れた学びができていた」「自信に繋がりが、自身が災害発生時に活動したいという意識につながっていた」「災害発生時には建物の倒壊、停電、洪水が突然訪れる危険性を実感でき、冷静な行動の必要性を感じてきた」「災害時に看護職としての役割を果たすことができていた」
永井ら,2020 ²³⁾	地域住民と地域に専らした防災に関する授業の教育効果を明らかにする	3年生34名「救命救急医療論(災害看護)」を履修済み、4年生10名(災害看護の授業を選択している)	授業後に提出されたレポートを質的に分析	「平常時から対峙が重要であり、災害マップなどから情報を得ること、避難経路を歩いてみる、ことなどが必ずしも町会等の地域の活動に関心を向ける重要性」「避難所設置の難しさを実感」「自分たちができることをやる」
服部ら,2013 ²⁴⁾	東日本大震災における学生ボランティア活動の報告	2011年5月31日から7月7日、東日本大震災の被災地、岩手県釜石市と宮城県七ヶ浜でボランティア活動を行った。出発までに計3回の事前ミーティングを行い、個々の関係性を深めた。岩手での活動は主に公民館でのお茶会、サロンの運営、宮城での活動は主に応急仮設住宅集会所での活動(血圧測定、ハンドフレックソロジー、健康教育)	岩手(16名参加)、4年生6名、1年生10名、宮城(8名参加)、4年生5名、2年生3名	「限られた資源を大切に使う姿勢」「自分のできることではないことを明確にし、できる範囲の行動をとる重要性」「自己完結の意味」「被災者の思いを理解し、その思いを尊重した態度が必要」「住民が伝えようとしてくれることを懸命に聴くことが聴く側の役割」「被災者に寄り添うということは、被災した方々の体験や人生に思いを馳せ、その時間を共有すること」「子供の行動の意味を捉えて関わる必要性」「自分自身のストレスに気づき言葉に表すことが必要」「ボランティアの心の整理をするためにも、ボランティアの仲間を意識し、助け合うことが重要」「個人情報保護の観点から、どの情報が活動のために必要なのかを吟味して、共有すべき情報をボランティア間で定めていくことが必要」等を学んだ
祝原,2019 ²⁵⁾	被災地を訪問した看護学生の学びを明らかにする	平成30年7月豪雨災害の被災地、広島県南市のA町を、災害サイクルの復旧・復興期に訪問し、行政職員や支援者からの説明、被災現場の視察、応急仮設住宅住民との健康交流会を体験した	被災地での学びとして書いたA4版1枚程度のレポートを質的に分析	「被災するといふ現実」「平常時からの備えの重要性」「継続的支援のための知識、技術の獲得への意欲」「平常時からの備えが自助・共助・公助ともに必要で、看護の基礎的な知識や技術が大変重要であることを理解し、卒業後の意欲を高めることが明らかになった」
林ら,2017 ²⁶⁾	防災ガイドブック作成の活動報告	看護学部と教員が協同し、2015年9月から2016年1月の期間に12回(1回1.5時間)集まって防災ガイドブックを作成した	作成された防災ガイドブック緊急時連絡カード、垂直式降下袋の使用方法的説明資料	「実際に学内を歩いて避難場所や避難経路、消火栓等を確認することによって、避難時に想定される事柄を平常時に充分把握しておくことが、安全な避難行動に結び付くと理解できた」「防災に関する学習を通して、自分たちで調べたこと、防災への関心が高まったこと、防災への関心が高まったこと、もつと学びたいと思えるようになったこと、自分たちで調べたこと、防災への関心が高まったこと、防災への関心が高まったこと、もつと学びたいと思えるようになったこと、自分たちで調べたこと、防災への関心が高まったこと、防災への関心が高まったこと、もつと学びたいと思えるようになったこと」
谷口ら,2019 ²⁷⁾	災害対策マップ作り、地域の教育効果を明らかにする	A大学看護学部4年次期の災害看護の授業8回のうち、2回で、大学が立ち上げる地域の災害防災マップを作成、出来上がった防災マップをもとに意見交換	演習の前後で行った無記名自己記入式質問紙調査	災害時の地域活動に対するセルフアフィニティーやモチベーション、地域の災害対策についての関心度は演習前後ですべて前向きに変化した。演習で学生が学べた回数割合が80%を超えた内容は、災害時の自助の重要性、地域資源の活用と共助の重要性であった

2. 看護学生に実施されている防災教育の方法

看護学生を対象として実施されている防災教育方法は、論文数の多いものから順に、防災訓練⁹⁾⁻¹⁹⁾、講義・演習²⁰⁾⁻²³⁾、被災地訪問^{24) 25)}、学生による防災に関する資料作成^{26) 27)}の4種類であった。

3. 看護学生に実施されている防災教育方法とその効果

1) 防災訓練の効果

北村ら⁹⁾は、専門学校2年生39名を対象とした医療救護防災訓練で、傷病者や救助者の役割を担った学生は各役割を通してそれぞれの心理や態度を学び、見学をした学生は既習の知識と照らし合わせながら救助の様子を見ることでトリアージの仕方や組織的な救助活動を学ぶといった、各体験に応じた学習成果を明らかにしている。さらに、前田ら¹⁰⁾は、訓練後、個々の学習成果を参加学生全員で共有することで、自身が体験していない内容を知り、さらなる学習の動機づけに繋がったことを報告している。増田ら¹¹⁾は、アクションカードを用いた防災訓練を行った。アクションカードとは、緊急時に集合したスタッフの「行動指標カード」であり、限られた人数と限られた資源で、できるだけ効率よく緊急対応を行うことを目的としている。学生12名・教職員27名の計39名で実施したところ、「臨場感のある訓練だった」と肯定的に評価された一方、「学生の訓練に対する希薄な意識」「指示に対する迅速な対応の不足」「教職員間における情報伝達の不足」が課題として挙げられた。河村ら¹²⁾は、2年生42名が、市内一斉防災訓練の際、各小学校の体育館内に健康チェックのブースを設営し、訓練者の健康相談（血圧測定等）を実施した成果として、【臨床実習と防災訓練での環境の違い】、【地域で生活している住民を知る】、【防災訓練の意義】、【災害発生時の避難所看護の在り方】、【外国人被災者への支援策】、【内服薬やお薬手帳の携帯の必要性】を挙げている。

原田ら¹³⁾は、3-4年生5名が、市主催の災害訓練への参加に加えて、同市で2年前に発生した豪雨災害の際にボランティアセンターの立ち上げと運営に携わった医療福祉専門職による研修会への参加と、メディカルラリー（医療チームが特殊メーキャップを施した模擬患者を診察し限られた時間内に的確に治療ができるかを競う技能コンテスト）の見学を実施した成果として、【災害に生かせる応急処置】、【緊急場面で求められる能力】、【緊急場面で必要な職種間の連携】、【被災者と地域住民への配慮の重要性】、【地域住民と日頃から関わる必要性】、【参加団体（職種）の役割を知る】、【被災者を支えるボランティア支援の重要性】、【多様な訓練場面設定からの学び】を挙げている。さらに横田ら¹⁴⁾は、避難所の宿泊体験をした成果として、自身のこれまでの生活を振り返り、「非常食や飲料水の用意」など、手軽に準備できることから取り組もうとする意識へ変化したことを明らかにしている。

丹下ら¹⁵⁾は、学区で実施された防災訓練へ他学科の学生とともに訓練前の準備から参加した学生の学習成果を明らかにしている。1年生は「準備期間が短いという焦り」、「何もわからない、周囲へ迷惑をかけないだろうかという不安」などを感じていたが、「先輩との安心できる関係性」が構築されて

いたことから【準備期間における良好なチームワークの構築】が抽出された。また、訓練開始後、1・2年生ともに「予想以上の避難所の混乱状態」に驚き、「非日常的な状況下ではパニックになる自分を知った」ことから【訓練実施時、平常心でない精神状態】になり、混乱状態時「避難場所で様々な機関と情報共有を図る難しさ」を感じ、有事の場合に被害を拡大させないためにも「報告・連絡・相談」「個々が情報を共有する努力」の重要性を理解していたことから【正確な情報の大切さ】が抽出された。さらに「知識不足を実感」して自己嫌悪感を抱き「日々の積み重ねが大切」であること、「繰り返しの訓練が、いざという時に役立つ技術」になり、「基礎的な知識・技術を習得した上での応用訓練が大切」であること、「多くの負傷者へ対応する難しさ」から「早く救命できる対応力」を身につける必要性を感じていた。加えて「トリアージタグの判断は人の命を左右する責任の重いもの」であり「重要な判断を短い時間で行うためには、的確な判断力や冷静さ、他の人との連携が重要」といった意見から【知識・技術習得の重要性】が抽出された。また、1年生は、チームで動く場合、「個々の技術力が人の命に関わる」ため、主体的に動いている先輩のように「自らが声かけ」をし、「自ら動く」ことができる看護師になりたいと望んでいたことから【1年生の自律へ向けた看護師像】が抽出され、2年生は、「負傷者に安心感を与えられる気遣い」ができ、「専門職者としてリーダーシップがとれる」看護師（救助者）になりたいと望んでいたことから【2年生のリーダーシップがとれる看護師（救助者）像】が抽出された。そして、地区の人々と一緒に新聞スリッパを作った際、「あんがい、温かいのね」「ありがとう」と「感謝されたことに喜び」を感じ、「感謝の言葉がもっと知識や技術をつけたいという思いに繋がった」こと、地区の人々をはじめ警察官や消防署、機動隊、大学など様々な人と関わって「人と人とのつながりを感じることができ、とても有意義な防災訓練」であったこと、「今回の経験で学んだことを、自分の力にして今後活かしていきたい」と感じられたこと、「看護職を目指す学生として貴重な体験」ができたことへの感謝とともに、将来看護職者として「南海トラフ巨大地震への備えへの重要性」を改めて認識できたことから【日頃からの地域住民との触れ合いの大切さ】が抽出された。

さらに、他学科との協働により、「防災・減災活動への責任を感じる」「新たな視点を知る」「相互に刺激し合う」「それぞれの専門分野の特徴を活かす」など【専門職としての視野の深化】や【多職種連携の重要性】、「対象に合わせて表現する」「情報共有の方法を模索する」など【学問背景の異なる者への情報提供の配慮】についても学んでいた。全プロセスを通して、地区の人々は、居住地の地盤が低いことを知っているからこそ防災意識が高いことを知り、「訓練は地域住民が避難路を確認する機会となる」といった地域住民にとっての防災訓練の意義を認識するとともに、同地域に立地する大学が果たすべき防災に関連した役割・機能について考える契機となっていた。

政時ら¹⁶⁾は、12名の学生が地区の総合防災訓練で模擬負傷者を担った学習成果を明らかにしている。模擬負傷者の受傷箇所に応じた傷シールを貼付したりアイマスクを装着したりと、実際に近づける工夫がなされ、12名のうちの9名が想像を超えた訓練のリアルさ、臨場感を感じていた。一連の訓練を

通して「被災者の心理」「多職種連携」「適切なトリアージ能力」「看護師のコミュニケーション能力」「災害看護の学習の必要性」について学んでいた。また、「災害看護を学びたい」「DMATについて学びたい」など災害看護への学習意欲を向上させていた。一方、災害看護に必要な倫理問題や、災害発生時以外の看護の学びは得られていなかった。

丹下ら¹⁷⁾と柏木ら¹⁸⁾は、複数の県を跨ぐ大規模訓練に要支援者役として参加した学生の学習成果を明らかにしている。要支援者役を担った学生は、救助時の「放置されているという孤独感」「先が見えない不安」「人に身体を委ねることの怖さ」「早く治療を受けて安心したいという気持ち」「必死で考えながらいろいろと試しながら救助を待つ疲れ」「体力の消耗」「声かけ・迅速な判断・快活な動きの治療・搬送してもらえる安心」など、現場で生じる自身の感情から【要支援者の心理】を学んでいた。また、【要支援者の心理】を知ることで【要支援者のニーズに沿った援助】の重要性を学んでいた。さらに、訓練を通して救護員としての活動を行う自己の姿がイメージされ、学習の動機付けになっていた。

河村ら¹⁹⁾は、看護学部と日本語教員課程の学生約20名で、半年かけて防災訓練を計画・実施した成果を明らかにしている。学生は全員、自ら希望しての参加だった。「企画運営側の私たち自身まだ持ち出し袋を準備していない状況だったため、すぐに自分の持ち出し袋を準備しなくてはと思った」「企画運営側は住民さんに知識提供する立場なので、中途半端な知識ではダメだと痛感した」「自分たちで調べて情報を集めていくと、こういうものも災害時に使えるんだと身近な生活用品の見方が変わった」「災害の時にどのように行動すればよいかなど専門家の情報も大切だが、それよりも災害が起きた際に自分ならどうするかを考えられるかが重要だ」「これまで一緒に学んだ内容や防災に関する情報を自分からも発信しないとダメだと思う」など、主体的に取り組んだからこそ生まれた新たな視点、これまで以上の責任感・発信力が育まれていた。また、「両大学が協力できたことでN市の災害避難マップの在り方や活用方法など今まで触れたことのない考え方を知れて良かった」「被災時、自分は保護される立場と考えていたが援助側の動きを考えるきっかけとなった」「災害について考えている人がいるからこそ自分も普段から考えるようにしようと感じた」といった意見から、多様な立場の人たちとの交流によって自己理解が進み、行動変容へのきっかけとなっていた。

2) 講義・演習の効果

中村ら²⁰⁾は、災害看護学（1単位・15時間、内容：①災害とは、②災害看護とは、③災害中・長期の看護、④こころのケア、⑤テスト、⑥要援護者へのケア、⑦災害への備え、⑧国内外の救援活動）の履修の有無と、看護学生の「災害に関する関心度」「災害に対するリスク認識」「居住地域の災害危険場所の認知」の観点から検定を行ったところ、有意な関連は認められなかった。

林ら²¹⁾は、①講義（15分：地震・火災を想定した学内における災害発生時の基本的行動、大学との連絡の取り方、家族との連絡の取り方）と、②ウォークラリー（55分：学内の防災設備や避難経路等を実際に歩き、目で見て、手で触って確認する）と、①②に関する質疑応答および学内の防災施設・

設備の答え合わせと垂直式救助袋の使用手順の説明（5分）を実施した。その学習成果として【在校時の避難経路・避難場所を知る】、【学内の防災施設・設備の位置を確認する】、【地震・火災を想定した学内での災害発生時の基本的行動を理解する】、【学内における火災発生時の行動を理解できる】を挙げている。

井上ら²²⁾は、「救命救急医療論」の授業を、基礎・成人・精神・母性・小児・老年・在宅・公衆衛生からなる各看護領域の統合授業とし、発達段階、生活状況、災害サイクル、活動場所を考慮した領域別の災害事例を用いて実施した。結果、学生は情意領域に留まらず、認知領域、精神運動領域の調和がとれた学びができていた。そして、シミュレーションでの演習を行うことで自信が付き、災害発生時には活動したいという意欲が生じ、静穏期に行う防災の必要性へと考えを及ばせていた。なかには、災害発生時に看護職としての役割を果たすことができるのか不安な思いを抱いた学生が存在したことから、今後の課題として、学生の感情に寄り添った上で、安心感や意欲につながる授業方法を再構築する必要性を挙げている。

永井ら²³⁾は、看護ゼミナール（災害看護、1単位・15回）の2コマ（180分）を用いて、「大学のあたる地域の災害への取り組みと課題」というテーマで住民と協働して地域の災害に関する授業を実施した。内容は、①住民からの講話、②避難所運営ゲーム（HUG®）、③防災拠点の備蓄庫・マンホールトイレ・災害設備の見学、④地区踏査、である。結果、学生には、自分自身の災害対策や居住している地域に関心をもち、今後看護専門職になる立場から災害時にどのような役割が果たせるのかを考えるという意識の変化がみられた。

3) 被災地訪問の効果

服部ら²⁴⁾は、2011年8月31日から7日間、東日本大震災の被災地、岩手県釜石市と宮城県七ヶ浜でボランティア活動を行った学生の学びを明らかにしている。学生は、【被災が実際に存在する現実に直面】し、住民と接することで早期に【被災者ではない自分を自覚】していた。そして、住民の限られた資源を大切に使う姿勢から【平常時からの備えの重要性】【被災地の生活に合わせて生きる】ことを学び、「被災地の人々の語りの中には震災にあった人しかわからないこともあり、何か言ってほしいから自分達に話しているのではなく、私達が受容・共感することで相手の気持ちの整理につながることを、伝えようとしてくれることを懸命に聴くことが聴く側の役割と感じた」「被災者に寄り添うということは、何かをすることではなく、被災した方々の体験や人生に思いを馳せ、その時間を共有すること」など【ボランティアのペースではなく住民の思いを尊重した態度】を学ぶとともに、「自己完結の中にはボランティアの活動範囲における責任も含まれている」などの意見から【“受容”“共感”“傾聴”“人に寄り添う”といったコミュニケーションにおける重要概念や、ボランティアの基本姿勢である“自己完結”といった概念を体験を通して理解】していた。また、住民と一緒に過ごすなかで【自助・共助と公助の重要性】を学んでいた。攻撃的になっていた子どもへの対応がわからなかったが、後に、

それは震災後に典型的な震災後の反応であり、子どもなりのストレスを発散する行動であったと知ったときに、被災した人々に関わるボランティアすべてが、被災した子どもたちがどのような反応をするのかを事前に学習し、子どもの行動の意味を捉えて関わる必要があると思ったことから【看護の基礎的な知識や技術が大変重要】であると感じ【学業への意欲を向上】させていた。また、今だけでなく【今後も継続して支援するための知識・技術の獲得への意欲】を生じさせていた。さらに、「話を聴くことは、我々のような学生のボランティアには負担が大きい。だからこそ、同じ体験をした仲間と話し合い、自分自身のストレスに気づき、言葉に表すことが必要だと感じた」「自分のできること・できないことを明確にし、できる範囲の行動をとる」などから【自分自身の限界を認めること】、ボランティアの心を整理するために【仲間と助け合うこと】【ブリーフィングとデブリーフィング】の重要性を学んでいた。また、ある自治会役員の家族が、「自分の知らないうちに自分の事情が皆に知れ渡っている」と嘆いていたことを知り、【どの情報が活動に必要なのかを吟味して、共有すべき情報をボランティア間で定めていくことが必要】であることも学んでいた。

祝原ら²⁵⁾は、平成30年7月豪雨災害の被災地、広島県南部のA町を、災害サイクルの復旧・復興期に訪問し、応急仮設住宅住民との健康交流会を体験した学生の学習成果を明らかにしている。学生は、「被災時の緊迫感や被害状況の大きさ」「被災者ニーズへの対応の難しさ」「被災者が抱える様々な思い」「仮設住宅住民の健康意識の高さ」を知り【被災するという現実】を学んだ。また、「支援者・受援者の相互理解や情報共有が重要」「平常時からの備えのあり方」から【平常時からの備えの重要性】を学び、「被災者との交流の継続は大切な支援」「災害支援に役立つ技術や知識獲得への意欲」から【継続支援のための知識・技術の獲得への意欲】を生じさせていた。

4) 学生による防災に関する資料作りの効果

林ら²⁶⁾は、教員7名と、教員の呼びかけにより自主的に参加した看護学部の1年生3名が協同し、約半年間に12回（1回1～2時間）集まって実用的な防災ガイドブックを作成した。最終回で学生は、「毎回の活動は楽しく、想像していたよりも大変ではなかった」「防災ガイドブックは簡単なものを作成すると思っていたが、立派なものができあがった」「話し合いを通じて学生が使いやすいものができあがり、満足である」といった感想の他に、「今までパンフレットなどを作ったことがなかったため、印刷業者との交渉や、大学機関誌のインタビューを受けるなど、よい勉強の機会になった」「防災に関する学習を通して物事を見る視点が広がり、防災への関心がより深くなった」「もっと学びたいと思うようになった」「自分たちで調べて自分たちにとって必要な情報を取捨選択し、さらに他者にわかりやすい言葉で表現することの大切さと難しさを学ぶことができた」と語った。そして、自分たちの在学中は今回作成した防災ガイドブックや緊急時連絡カードの配付と説明を下級生に行いたいとの申し出とともに、自分たちの学年だけでこの活動をするのではなく、他学年と一緒に継続して活動していきたいとの意思表示があったこと、そして、学生3名は、言葉通り、実際に防災活動を行っていること

が報告されている。

谷口ら²⁷⁾は、4年次後期の災害看護の授業全8回のうちの2回を用いて、大学が立地する地域の災害対策マップ作りを行った。その際、教員は指示せず、学生はグループメンバーと話し合いながら作成した。この活動を通して、学生の災害時の地域活動に対するセルフエフィカシーやモチベーション、地域の災害対策についての関心度は演習前後ですべて前向きに変化した。演習で学生らが学べたと回答した割合が80%を超えた内容は、「災害時の自助の重要性」と「地域資源の活用と共助の重要性」であった。

考察

防災訓練で、学生は、臨場感あふれる場で要支援者として支援されることで、支援される人々の感情を追体験し、その追体験した要支援者の感情をもとに、支援者の在り方を考えることができていた。また、見学者は、既習の知識と見学内容を照らし合わせることで、つまり、意図的に認識を演繹的・帰納的に上り下りさせることで、災害看護への理解を深化させていた。また、振り返り、いわゆるリフレクションを通して、具体的な体験を言語化し、それらを共有することで学習成果を倍加させていた。

避難所生活体験は一歩進んだ防災対策を考えるきっかけになるといわれている。理由としては、備蓄している資材を活用して仮設トイレを組み立てたり、水や寝床、食料を確保したりといったサバイバル生活を送ることで、自ら考え、行動することの重要性が再認識されることが挙げられている。防災訓練も同様に、疑似体験を通じて、災害発生時に何が起きるのか、自分にどのような影響が及ぶのかを理解することは、適切な防災対策につながる可能性が高いと考えられた。

住民参加型の訓練では、地域の人々との交流のなかで、地域で起こりうる災害について知り、日頃から地域住民と関わり災害に備える必要性を学んでいた。また、大学には地域の防災に関連した役割・機能があるという意見もあった。私自身、地域に根ざした大学のあり方として、大学という教育機関を防災拠点として活用できると考えている。今後、できるだけ早期に、大学として、災害への備えや地域全体の防災力を高めていくための方策を、地域の実情に合わせて検討していきたい。

今回、防災訓練を学生が計画し、準備した河村ら¹⁹⁾のケースから、同じ訓練過程であっても、学生側の主体性の在り様で、学習成果の質が変わることがわかった。学生主体での取り組みでは、運営側の学生の「企画運営側は住民さんに知識提供する立場なので、中途半端な知識ではダメだと痛感した」という言葉や、持ち出し袋を皆さんに準備してもらうのなら自分たちが持っていないとダメという態度から、初期の段階で学生の内に大きな責任感が生まれていたことがわかる。また、彼らは、既存の道具や専門家の意見を普通に用いるのではなく、それらを今向き合っている課題に合わせてどう使うかを考え始めるといった、思考の働かせ方の大変革を起こしている。さらに、多様な人々との交流に

よって、さらなる変化が生じ、価値観の変容、そして行動の変容へと加速度的な成長が伺えた。このケースから、体験を伴う学習においては、「学生の主体性」が重要な鍵になることが示唆された。それはアクションカードを用いた増田ら¹¹⁾のケースでも裏付けられる。このケースで挙げられた3つの課題「学生の訓練に対する希薄な意識」「指示に対する迅速な対応の不足」「教職員間における情報伝達の不足」から、背景に、学生間や教職員間に取り組みへの意欲の差があったのではないかと推測された。アクションカードは、限られた人数と限られた資源のなかで、できるだけ効率よく緊急対応を行うことを目的としているため、訓練本番では“カードに書かれている行動をとる”ことになる。教育における体験の定義は「学習者にとって直接的で印象深く、大きな影響を与える非日常的な機会」²⁸⁾である。アクションカードを用いた訓練自体が不測の事態に対して主体的に考え行動するタイプの訓練ではないことをふまえると、訓練本番よりもアクションカードを作成する過程に学習効果が大きいと考えられた。災害訓練をより効果的な体験にするためには、何を付加するかについて吟味する必要があるといえる。災害訓練自体は非日常的ではあるが、実施する日が決まっているイベントである。工夫を重ねて、学生の主体性を引き出す災害訓練の実施が課題であるとともに、学習効果の継続性がさらなる課題であると考えた。

講義は、濱本ら⁶⁾の研究で、現時点では学生の防災に対する意識に影響を及ぼさないとされている。中村ら²⁰⁾の研究結果も同様の結果であった。一方的に知識を提供する授業では、学生の主体性は引き出せないため、演習を行うことで、学生の体験を増やす必要がある。林ら²¹⁾は、講義と演習にリフレクションの時間を設定することで、在学中に被災した場合の基本的な対応を伝えることに成功している。この方法は、新入生ガイダンス時に実施すると効果的であると考えられる。しかし、学習内容の定着を図るために定期的な確認が必要である。

井上ら²²⁾の取り組みは、災害看護を基礎・成人・精神・母性・小児・老年・在宅・公衆衛生からなる統合授業とし、発達段階、生活状況、災害サイクル、活動場所を考慮した領域別の災害事例を用いて実施した講義・演習である。災害看護の新カリキュラムにおける統合の意味、つまり災害看護は科目間の枠を超えた知識の連関であり、その学習内容は、あらゆる発達段階を対象としており、災害サイクルに応じて、健康増進および疾病予防から病気や障がいを取り扱うことが課題であることから、井上ら²²⁾の取り組みは、それらの課題を克服して実現した画期的な授業展開であるといえる。また、授業を通して防災の必要性を学んでいる点も評価できる。東日本大震災に遭遇した看護学生が、災害看護の授業に加えて欲しい内容として「災害への備え」「避難行動」「避難者としての行動」など被災者視点からの学習ニーズを挙げている²⁹⁾ことから、現行の教育内容には、個人の防災対策に関する内容があまり含まれていない可能性があると考えられる。看護学生の防災意識の向上のためには、災害時の自らの状況について想像する被災者視点の学習内容を加えるなど、さらに授業内容を検討する必要がある。ただし、災害が多発している昨今、被災している学生も相当数存在するため、それら学生

への配慮を怠ることなく授業することが重要である。

永井ら²³⁾は、地域住民参加型の授業・演習を行うことで、学生の居住地への関心と災害時の役割への意識を高めることに成功している。課題は、ここからどのように学生の主体性を引き出すか、防災意識を継続させるかである。

被災地訪問は、疑似体験ではなく、本物体験である²⁸⁾。服部ら²⁴⁾、祝原ら²⁵⁾のケースでは、学生は被災地の現実と直面し、濃密な体験をしている。短期間であっても、学習成果は大きい。本物体験は心の奥深くまで届く。そのため、「今」「そのとき」だけでなく、防災意識は高まり、持続する可能性が高い。学習効果は高いといえるが、その分リスクも大きい。災害に関わる本物体験では、ブリーフィングとデブリーフィングが特に重要である。ブリーフィングによって現場へ向かう準備を丁寧に整え、そして現地へ入る。毎日のデブリーフィングが重要であることはもちろん、すべてを終えて自身の日常に戻る前のデブリーフィングは、自身では気づいていない無自覚な心身への負荷を軽くするために必須である。防災教育を第一目的に被災地訪問することはないと考えるが、教員として学生と被災地を訪れる際、教員は学生のレディネスを見極め、訪問中は彼らから目を離さず、日常に戻ってからもしばらく見守り続ける必要がある。

林ら²⁶⁾と谷口ら²⁷⁾のケースから、学生による資料作りについても、鍵は「学生の主体性にある」と考えられた。自分で考え、行動することで、学生たちは前向きな意識へと変化し、前向きな行動へと進み出している。

以上より、看護基礎教育において学生の防災意識を高めて防災行動へと繋げていくには、居住地を視野に入れた防災を学生自らが考えられるような災害看護教育が必要であることが示唆された。その重要な鍵は「学生の主体性」であり、学生の主体性を引き出すには一方通行の講義ではなく、学生の感情を動かす疑似体験が有効で、さらにリフレクションを活用した取り組みが効果的であることが確認できた。

濱本ら⁶⁾は、看護学生の防災意識には、居住地の災害特性、災害経験、近年の大規模地震の発生、地域活動への参加意思や居住地への愛着、家族や友人との災害に関する会話、避難者の疑似生活体験が関連していることを明らかにしている。この結果を活用し、学生の防災行動が持続可能となるような教育方法を考えていきたい。

おわりに

防災訓練について書かれた論文11件中10件が、災害発生直後の初期対応の訓練であった。看護学生の災害看護への興味関心が災害直後の急性期の看護実践にあり、看護学生の防災意識が低く防災行動に繋がらない要因に、現行の災害看護教育が関係していることは明らかである。災害看護学教育の

目的は「災害直後から支援できる看護の基礎的知識について理解すること」であり、そのなかには個人の備えや地域防災を理解することも重要な学習目標の一つとして含まれている³⁾。この国土において災害の発生を完全に防ぐことは不可能であるが、被害を最小限に留めることは十分に可能である。多くの看護学生が防災意識を高め、防災対策が講じられることを目指して、防災意識や防災対策に関連する要因を考慮した教育を検討していく必要がある。

文献

- 1) 内閣府. 防災情報のページ 序章 1 災害を受けやすい日本の国土.
http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h21/bousai2009/html/honbun/1b_0joshou_01.htm
(アクセス日 2021/09/29)
- 2) Loke A.Y., Guo C., Molassiotis A. “Development of disaster nursing education and training programs in the past 20 years (2000-2019): A systematic review” Nurse Education Today Volume 99 April 2021.
- 3) 小原真理子「災害看護学 心得ておきたい基本的な知識 改訂2版」南山堂, 2013.
- 4) 西上あゆみ, 津村智恵子, 末原紀美代「看護学生の災害看護学授業に関する意識調査」看護総合, 2000. 31: 71-73.
- 5) 松清由美子, 野村志保子, 森本紀巳子「看護学生の防災意識とその影響要因」日本災害看護学会誌 2009. 10; (3): 36-49.
- 6) 濱本里彩, 白石三恵, 安井まどか, 岩本麻希, 島田三恵子「看護学生の防災意識・防災対策の実態とその関連要因についての文献レビュー」大阪大学看護学雑誌. 2017. 23; (1): 1-8.
- 7) 佐藤美佳「看護基礎教育における災害看護に関する教育体制等の現状と課題 全国実態調査から」日本災害看護学会誌. 2021. 22; (3): 85-98.
- 8) Achora S, Kamanyire JK “Disaster Preparedness: Need for inclusion in undergraduate nursing education” Sultan Qaboos Univ Med J. 2016; 16.
- 9) 北村美穂子, 城内貴代美「看護学生の防災総合訓練参加を取り入れた災害看護教育の実践 医療救護訓練参加後の学び」日本看護学会論文集:看護総合. 2011. 01; (41): 88-90.
- 10) 前田幹香, 増田信代「防災訓練にトリアージを取り入れた学習の実践報告」神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要. 2011. 10; (1): 1-5.
- 11) 増田信代, 五十嵐一美, 島田真由美「看護専門学校における発災型防災訓練の試み アクションカード使用による地震防災訓練の効果と課題」日本看護学会論文集:看護教育. 2017. 03; (47): 47-50.
- 12) 河村諒, 國松秀美, 坪井秀介, 白井千津「長久手市市内一斉防災訓練に参加した看護学生の学習成果」日本職業・災害医学会会誌. 2019. 05; 67 (3): 249-255.
- 13) 原田秀子, 田中周平, 張替直美「災害訓練への参加を通しての看護学生の災害看護についての学び」山口県立大学学術情報. 2012. 03; (5): 37-46.
- 14) 横田栄子, 白井陽子, 篠塚恵美子, 飯泉良枝, 石井美幸, 鈴木妙子, 稲葉麻美, 菊地早苗, 花澤映子「地域防災訓練における避難所宿泊体験の実態 参加した地域住民および看護学生の意識」成田赤十字病院誌. 2011. 02; 13: 70-73.
- 15) 丹下幸子, 鈴江毅「岡山市平井学区防災訓練への学生参加による災害教育の試み ネットワーク・地域住

- 民との連携と地域貢献, 人材育成のあり方」山陽論叢. 2013. 12 ; 20 : 25-35.
- 16) 政時和美, 村田節子, 松井聡子, 中井裕子「総合防災訓練に参加した学生の学習意欲と学び」福岡県立大学看護学研究紀要. 2017. 03 ; 14 : 49-57.
- 17) 丹下幸子, 鈴江毅「大規模地震を想定した防災訓練に参加した学生の学び」山陽論叢. 2015. 02 ; 21 : 55-65.
- 18) 柏木ゆきえ, 新沼剛, 永易裕子「日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練における A 大学および A 短期大学の取り組み」日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学紀要. 2016. 03 ; (20) : 81-86.
- 19) 河村諒, 板津良, 宮谷敦美, 東弘子, 坂本真理子「看護学部および日本語教員課程の学生の学び 防災訓練活動を立案・実施する協働プログラムから」国際ナショナル Nursing Care Research. 2020. 04 ; 19 (1) : 87-97.
- 20) 中村有美子, 藤井可苗, 菅野夏子, 小野ツルコ「看護学生の災害看護学履修別防災意識と防災行動の検討」, ヒューマンケア研究学会誌. 2013. 05 ; (1) : 55-60.
- 21) 林和枝, 菊地亜矢子, 中川名帆子, 西村淳子, 近藤裕子, 白田成之, 谷口恵美子「看護学部の学生および教員に対する防災教育 防災セミナーと防災に対する意識調査」岐阜聖徳学園大学看護学研究誌. 2016. 03 ; 1 : 50-56.
- 22) 井上弘子, 山本智恵子, 藤田彩見, 山本裕子, 丸山純子, 真壁五月, 山下亜矢子, 木下香織, 宮武一江「シミュレーション教育による「災害看護」の教育効果と課題について」新見公立大学紀要. 2019. 40 : 171-177.
- 23) 永井智子, 吉田千文, 竹内幸美, 四登夏希, 相澤恵子, 山田雅子, 西村恵理奈「住民と協働して実施した地域の災害対策に関する授業の実践」聖路加国際大学紀要. 2020. 03 ; 6 : 64-69.
- 24) 服部将茂, 前田志織, 立木真美「東日本大震災における学生ボランティア活動報告 防災関連サークルが企画した被災地ボランティアで考えたこと」日本赤十字豊田看護大学紀要. 2013. 03 ; 8 (1) : 53-58.
- 25) 祝原あゆみ, 渡邊克俊「平成 30 年 7 月豪雨災害の被災地を訪問した看護学生の学び」島根県立大学出雲キャンパス紀要. 2019. 12 ; 15 : 65-72.
- 26) 林和枝, 近藤裕子, 白田成之, 菊地亜矢子, 中川名帆子, 西村淳子, 谷口恵美子「看護学部の学生との協同による防災ガイドブック作成活動報告」岐阜聖徳学園大学看護学研究誌. 2017. 03 ; 2 : 13-20.
- 27) 谷口千枝, 佐藤晶子, 奥野友紀, 又吉忍, 齊藤由里恵, 杉浦美佐子「看護学生に対する地域での災害対策マップ作り演習の教育効果」日本災害看護学会誌. 2019. 05 ; 20 (3) : 3-13.
- 28) 高橋平徳, 内藤知佐子編「看護教育実践シリーズ 5 体験学習の展開」医学書院. 2019 : 65.
- 29) 尾崎道江「災害看護学教育における教育的課題—東日本大震災に遭遇した A 大学看護学生の体験から—」茨城キリスト教大学看護学部紀要. 2011 ; 3 : 47-56.